

1. プロジェクト研究A1および学術フロンティア推進事業プロジェクト研究

(1) コアプロジェクト 自己決定とQOLプロジェクト(研究代表者:文学部教授 望月 昭)

「自己決定とQOL研究会」では、障害のある個人に対する援助・教授設定を検討する目的で、以下のような実践・研究活動を行った。

- 1) 障害のある生徒における「自己決定」実現のための援助・教授設定の検討
- 2) ADHD児における集団遊びへの選択機会提供による参加支援
- 3) 障害のある学生や個人におけるコミュニケーション確立のための援助・教授設定の検討
ろう学生の講義保障のためのノートテイクに関する実践的研究
ろう重複の障害のある成人のための携帯メール/写メールを用いたコミュニケーションの研究
慢性失語症患者の地域における代替コミュニケーション(書字・携帯画面を用いた)成立の支援
HSPオンラインで行なうパソコン要約のための専門用語登録辞書ソフトの制作
- 4) HSPを利用した施設におけるQOL拡大のための討論
- 5) HSP上での、自己決定、QOL、そしてそれに関連するコミュニケーション成立のための援助・教授に関わるデータベースの拡充を継続させた。

1)では、重い知的障害のある養護学校の生徒を対象に、既存選択肢の否定スキル獲得のための設定と教授プログラムの開発、2)では、集団遊びへの参加を選択機会設定によって促進するプログラムの検討を行った。3)は広義のコミュニケーション成立のための実践・研究であり、人的あるいは物理的援助設定(パソコン、携帯電話)を介在させた援助設定の検討であった。では大学授業場面、では日常生活場面を想定した実践研究が行われた。4)については、HSP上で施設環境におけるQOL拡大や行動問題への対処に関する課題等が国内の実践者・研究者の間で討論が行われた。

上記の研究内容は、実験的研究としては、1)2)の障害のある個人(生徒が中心)の「自己決定(選択決定)」の指導や設定の効果を直接的に検討したものと、3)の、学校場面や地域におけるQOL拡大を念頭においたコミュニケーションに関するもの、が挙げられる。

研究面での新たな展開として、1)2)では、従来、組織的プログラムが少なかった選択肢否定行動の教授プログラム、また適応的行動拡大のための「(おだやかな)否定の選択肢」導入の教授プログラムとその効果が確認された。いずれも環境設定を自らが指定・拡大する要求言語行動(mand)の機能を備えた社会的行動としての「自己決定」行動に必要な環境設定やそのもとの教授プログラムを検討したものである。3)の研究シリーズは、障害性の軽減やより積極的にQOLを拡大するための「援助設定」の開発や効果を検討したものであるが、3)では、ノートテイクという援助作業のパフォーマンスや効果を実証した初めての研究である。では、文字、静止画の複数のモードを用いるコミュニケーション手段としての携帯電話の研究に関しては、初めての研究である。4)は、HSP上において限定公開の上で関係者が討論を行なう初めての試みであったが、こうした内容を、より効果的な援護活動としての機能を持たせるために今後は公開の方向で進めていきたい。5)については、下記の臨床社会学プロジェクトの「第三者評価の議論」や「臨床社会学文献データベースとも連携した形で継続していきたい。

(今後の活動の見通し)

2004年度には、03年度までの研究成果を踏まえて実践研究をさらに展開するとともに、障害のある個人におけるQOL拡大を目指した自己決定とコミュニケーションの支援を中心課題として、対人援助実践の方法論について集約していきたい。援助設定の恒久的実現や援護活動、さらに諸専門領域との連携のためにHSPを基本とした情報交換と発信の方法を重点的に検討していきたいと考えている。

(2) コアプロジェクト 臨床社会学(研究代表者:産業社会学部教授 中村 正)

- 1) 参加者の個別の研究主題をもとにして、各分野での臨床社会学の追究をおこなった。臨床社会的な主題としては、不登校、外見の研究、家族機能不全と家族再統合(里親など)、障害学、ホームレス問題、家庭内暴力問題、リプロダクティブ&セクシュアル・ヘルスなどである。特に、研究方法としての「質的調査研究」に力点を置き、先行する研究のデータ化を射程におきつつ、研究をすすめた。これらはヒューマンサービスプラットホーム上の文献データベースとして蓄積することとした。
- 2) ヒューマン・サービスをめぐって生成している新しいpro-social behaviorの実践(ボランティア、

NPO、福祉機器援助、福祉サービス、ソーシャルサービスなど)を評価する研究をおこなった。とくに社会福祉法でうたわれた第三者評価(福祉施設でのサービスアセスメント)の問題を重視した。プロジェクト代表の中村が「第三者評価機構・きょうと」研究会にかかわり、研究をすすめた。とくに、価値財的要素、情報の非対称性、不確実性、個別性、公共性、非競争性(必ずしも競争になじむわけではない)という特質をもつサービス領域であるため、そのサービス評価については多元的な評価軸が必要であるとの見地から、基礎的な研究や論点整理について福祉施設経営者との共同研究をおこなった。その一部は応用人間科学研究科の公開科目としてもプログラム化し、社会との共同をおこなう地歩を築いた。この福祉サービス第三者評価は、臨床社会的なQOL評価として科学的に体系化する計画の一部である。さらにその内容はヒューマンサービスプラットフォーム上にデジタル化して公開する予定である。

(今後の活動の見通し)

- 1) 2004年度は学術フロンティア研究としてのまとめをおこなう。ヒューマンサービスプラットフォーム上の臨床社会学文献データベースをさらに蓄積する。
- 2) 福祉サービスの臨床社会的な評価研究については、さらに継続した共同研究をおこなう。第2回目となる公開研究会あるいは講座を福祉サービス実践者とともに組織し、その成果をヒューマンサービスプラットフォーム上にデジタルデータ化し、社会との臨床の知をめぐる対話の場にする。

(3) コアプロジェクト 対人援助学の理論・方法・歴史 QOLサブプロジェクト

(研究代表者:文学部助教授 佐藤 達哉)

心理学のみならず、社会学、科学史、統計学の専門家でチームを組み、対人援助学の理論・方法・歴史について広範な検討を行った。

質的研究が対人援助学を学範知におしあげる突破口であるという認識に立ち、質的研究の行い方について数回のワークショップを行い、公開シンポジウム・公開講演も行った。

また、本学客員教授・バルシナー氏の講演・シンポジウムを企画し、文化心理学のあり方について理解を深めることができ、この理論が対人援助学に対してもきわめて有効であると見通しを持つことができた。現在は心理学の方法論に関する論文を執筆中である。

文化心理学という立場から見た「サンプリング」問題を考究することが、対人援助の実践知を学範知に結びつける手がかりになるという見通しを持つことができた。

科学社会学においては、社会と学問の関係を重視するモード論が、人々の科学技術等への理解(パブリック・アンダースタンディング論)、ひいては、科学技術ガバナンス論へとつながっていくという道筋の理解を行った。

その上で、モード論、パブリック・アンダースタンディング論、ガバナンス論を、狭義の科学技術にとどまらせるのではなく、人文・社会系科学の領域にも適用することの意義が確認できた。情報発信側の社会的責任論にもつながるものである。

「障害の科学」史の取り組みとして、戦前の厚生省・軍事保護院について調査を行った。

(今後の活動の見通し)

来年度は本研究全体における連携についてのあり方についても考察を深めつつ、収束させたい。

(4) サブプロジェクト 家族プロジェクト(研究代表:産業社会学部教授 中村 正)

家庭内暴力の加害者・虐待者対策についての研究を継続した。修復モデルによる更生のための援助実践の理念、技法、政策、制度を開発し、研究し、実践するという「リサーチ&ディベロップメント」型の目標をたてて研究を進めている。介入的な援助モデルは罰による行動変容ではなくて、pro-activeな援助による行動変容をめざすものとしてプログラムの開発をおこなっている。2003年度もそれまでと同様に、加害者向けのグループワークを当プロジェクト代表の中村が代表世話人をつとめるメンズサポートルームにおいて実施した(京都、大阪で春と秋にかけて実施した)。また関連する相談としては、立命館大学心理・教育相談センターのカウンセラーらとともにカップルカウンセリングや個別のカウンセリングという形態で実施した。これらは今後の事例研究の基礎をなす家族臨床的研究として位置づけられている。研究代表者の中村は、2002年度に組織された内

閣府の家庭内暴力加害者更生施策検討委員会委員を 2003 年度も継続し、本プロジェクトの成果をもとにして、家庭内暴力加害対策への政策・制度提案をおこなった。さらに、2004 年度には東京都男女共同参画審議会の専門委員としても委嘱をうけ、自治体レベルでの政策にも提案をおこなった。

さらに、本プロジェクトの内容を深めるための国際的研究として、2004 年 10 月からはオーストラリアの家庭内暴力加害対策について比較研究調査に取り組みはじめた（代表者・中村）。

また、少子高齢化という人口動態が家族に与える影響と家族の変化に関する研究として、子育て支援に関する複数の調査研究に着手している。ひとつは、妊娠・出産期からの子育て支援環境構築に関する調査研究であり、医療生協の協力の下、家族形成過程における親意識の変容と、その過程への援助実践のあり方（インフォームドチョイスを基礎とする医療体制と専門職間の連携、父子関係の意識化、夫婦関係の再編とその援助、エンパワメント型の援助実践の工夫）について、調査研究を行っている（主に松島）。もうひとつは、家族内外での世代間関係の変容と再構築に関する調査研究であり、シニア層におけるライフコースの長期化とライフデザインの多様化という観点からの、多世代交流型の子育て支援環境に関する調査研究である。財団法人シニアプラン開発機構の協力の下、NPO 法人ニッポン・アクティブライフ・クラブ（NALC）会員を対象とするアンケート調査と、多世代交流型子育て支援を行っている NPO・団体のヒアリング調査を行った（主に斎藤）。

また、親密性を構成する家族関係の根底にかかわる問題領域へのアプローチとして、ストックホルム大学からの共同研究の依頼をうけ、暴力・ジェンダー・セクシャリティの国際比較研究（スウェーデン・ウルグアイ・日本）の予備的研究に着手した（主に、中村、斎藤、松島）。

（今後の活動の見通し）

プロジェクト所属の村本教授が主たる担当となり、2004 年 6 月に国際シンポジウムを開催する予定である。司法、心理、教育、福祉の総合として取り組まれている家庭内暴力対応について、米国の経験をもとにして、精神医学、臨床心理学、法律学からのシンポジウムを開催する。

（5）サブプロジェクト 子どもプロジェクト（研究代表者：文学部教授 高木 和子）

当プロジェクトでは、(1)子育て支援・親の育ち・子どもの育ち合い、(2)療育援助、(3)思春期援助の 3 グループ構成で活動を進めてきた。各グループでは、(1)就学前の子どもを養育する立場にある者、(2)自閉症など関わり合いに難しさのある子ども、(3)中学生・高校生など思春期の発達課題を抱える者を援助する立場にある者（教師）など、研究対象は異なっている。しかし、援助する者が主体的に問題に取り組む過程を援助し、またその様相を明らかにするという点で共通点を持っている。また、2002 年度からは研究視点の再構築と精緻化の必要からライフデザインプロジェクトとの情報交換をすすめてきている。

2003 年度では、親の育ちを考える際に、就労など親の権利を保障するという側面と子どもの暮らしを保障する側面との両方を考慮に入れる必要があることから、6 月 21 日に 24 時間保育についてのシンポジウムを開催した。このシンポジウムでは、長時間保育の是非を問うことを目的とするのではなく、すでに起こってしまった現象についての我々の理解を深め、今後に生かしていくことを目的とした。参加者は 80 名とそれほど多くはなかったが、毎日新聞の大阪版にとりあげられるなどの、反響をよんだ。24 時間対応型の保育や一時保育などの現場での問題にどう対応していくのかを社会システムの問題としてではなく、子どもと大人の育ちの問題として取り上げていく視点が明らかにされてきた。

このシンポジウムの報告を含めたわれわれの研究グループの成果を、子育て支援につながる研究を主体にして論文としてまとめ、『人間科学研究第 6 号』（3 月発行予定）の特集号に掲載予定である。

それ以外での各グループの研究活動は以下のとおりである。

子育て・親育ち・共同グループでは、子どもと接するときの大人側の読み取りに関するデータの収集と分析を行なう。一つ目、2 年前より始めた保育園児の砂蟻の観察データを「大人の支援を引き出す子どもの行動」という側面から検討する。二つ目は、保育園乳児クラスでの子どもと大人との関わりの中で、大人が子どもの行動の意味をどう読み取っているのかについて観察・分析する。

三つ目の柱として、山形市の NPO 法人山形育児サークルランド「子育てランドあーべ」と山形市立つばさ育児支援センターとの協力をえて、山形における育児支援活動の実態と参加する人々の育ちの実態調査を開始した。

療育援助グループでは、自閉症およびアスペルガー障害の幼児同士の関わりへの介入と援助を目的とした活動を社会学研究科と応用人間研究科の院生を中心にした「あひるクラブ」(毎月土曜日)を昨年(2003年)5月よりたちあげ、集団療育および親指導を始めている。

思春期援助グループでは、中学生の学校相談場面におけるチーム会議の展開および、不登校の親の会における活動への援助とその分析を行っていく。後者の研究成果は前出の中間報告に載せられている。

これら現在進行中の研究については、2005年3月の最終報告書にはまとめられる予定である。

(6) サブプロジェクト 臨床教育プロジェクト(研究代表者:文学部助教授 中川 吉晴)

公開の研究会は以下のとおり16回開かれた。当初、予定していた回数(5回程度)の3倍におよぶ開催数となった。ほとんどが学外の専門家によるもので、成果の多い年度となった。詳しくは別表を参照。

- 1 自己発見ワークショップ3 佐貫幸代ほか(応用人間院生)
- 2 自己発見ワークショップ4 佐貫幸代ほか
- 3 イラク戦争を日本の子どもたちはどう見たか 川手鷹彦(治療教育家)
- 4 文化の核心としての治療教育 川手鷹彦
- 5 身体ほぐしワークショップ 五十川啓子(身体技法研究家)
- 6 芸術による自己変容 アートワークショップ 松田佳子(教育哲学者・芸術家)
- 7 治療教育の実際1 悪と死の哲学 川手鷹彦
- 8 治療教育の実際2 アスペルガー症候群について 川手鷹彦
- 9 実存とコスモス 建設的ポストモダニズムと実存の次元 林貴啓(教育哲学研究者、京大院)
- 10 「体験をすすめる言葉」を見つける ワークショップ 村川治彦(心理学・身体学者 米国在住)
- 11 シュタイナー教師養成コースで学んだこと 吉田ゆきえ(教育家・養成課程修了者)
- 12 ヨーガ・ムーブメント・アート ワークショップ スーザン・アレン、スシオワン(教育家・芸術家)
- 13 「何もしないこと」から「何もしないこと」へ 野口整体の健康観を中心に 本庄剛(教育人間学研究者)
- 14 キッズ・ゲルニカ・ワークショップ キッズ・ゲルニカへの国際的取り組み 金田卓也(芸術教育)
- 15 治療教育の実際3 「真夜中の銀河鉄道」実技と討議 川手鷹彦
- 16 治療教育の実際4 同上

今年の研究会の特徴として、ワークショップがふえ、とくに芸術活動の臨床教育的側面と、身体技法の臨床教育的側面が研究された。現在、もっとも注目される治療教育家である川手鷹彦氏による研究会は6回2日連続が3回におよび、治療教育の実際について多くを学ぶ機会が得られた。ほかにも、建設的ポストモダニズムや、シュタイナー教師養成といった先進的なテーマがとりあげられた。また、特筆すべき活動であったのは、キッズ・ゲルニカ・ワークショップであり、これにはキッズ・ゲルニカ国際委員会代表の金田卓也大妻大学助教授も来て、講演のみならず、ワークショップを最後まで指導していただいた。このワークショップは、教育と芸術と社会活動が結びつくものとして、臨床教育のひとつの有効な実践形態となるものであることが立証された。なおこのワークショップは、朝日新聞、京都新聞、NHK ニュースでもとりあげられた。

後期公開企画 ケアがつなぐもの・ひらくもの

臨床教育部会は、上記の公開企画を応用人間科学研究科と共催した。これは、伊勢真一監督によるドキュメンタリー映画(3本)の上映を行なったものであるが、いずれの映画も、障害者の自主的な共同体づくりが取り上げられており、臨床教育に不足しがちな社会的視座について、多くの有益な示唆がえられた。なお企画では、伊勢監督自身にお越しいただき、映画と共同体にまつわる話をうかがった。

林信弘教授による臨床教育の実践研究は、昨年度に引き続き、定期的に毎週継続して行なわれた。トレーニングルーム1を使用した。なお参加者のほとんどは院生である。

(今後の活動の見通し)

これまでの臨床教育サブプロジェクトにおける研究を総括する意味をもって、代表の中川が単著『ホリスティック臨床教育学』を年度内に刊行する(せせらぎ出版)。すでに、ここ数年の活動から原稿はそろっており、2003年度の予定をほぼ充たしている。なおこれは、2004年度科研費の出版助成に応募するとともに、2004年度の立命館大学研究助成出版物として採択されている。また、中川は、同著の実践編とし

て、『ホリスティック・アプローチ』(仮題)を刊行予定(駿河台出版)である。ほかにも、アメリカから、本年度刊行予定の共著の依頼を2件受けている。

林教授の研究会活動は、最終年度も継続して行なわれる。なおこの活動は、立命館の学内公募型研究プロジェクトとして申請された「行の総合的研究」に受け継がれる予定である。

最終年度も、研究会活動は、随時行なう予定である。

(7) サブプロジェクト バリアフリープロジェクト(研究代表者:文学部教授 東山 篤規)

一月あたり1~2回の研究交換会をもった。そこでは各自のデータを持ち寄って意見の交換を行った。成果の詳細は別項を参照されたい。

(今後の活動の見通し)

2004年度は、実験を続行しながらも、この間に学会などで発表してきた資料をまとめて論文を作成する予定である。

(8) サブプロジェクト ライフデザインプロジェクト(研究代表者:産業社会学部教授 津止 正敏)

研究者・院生・現場実践家たちと地域福祉臨床プログラム研究会を組織した。昨年来の3つのプロジェクト課題(地域福祉プログラム臨床研究会、ボランティアプロジェクト、障害児の放課後ケアに関する調査研究プロジェクト)に加え新たに男性介護者問題研究プロジェクトを立ち上げた。研究会は月1~2回開催し、地域福祉プログラムについての報告と討議を行ってきた。社会の変容過程に対応した地域福祉プログラムの成立基盤や担い手リーダー層、到達と課題などについて意見交換を行ってきた。研究会に参加している実践家とのネットワークの広がりによって依拠した研究テーマ・方法を心掛けてきた。

1. 地域福祉プログラム臨床研究会

子育て部門のプロジェクトの研究成果を取りまとめ、『子育てサークル共同のチカラ - 当事者性と地域福祉の視点から -』として刊行した(津止正敏・藤本明美・斎藤真緒編著、文理閣、2003年5月、1500部)。朝日新聞、京都新聞、京都民報、『福祉のひろば』(2004年2月号)の書評等で取り上げて頂いた。また、子どもプロジェクトと共同して「24時間保育」についてのシンポジウムを開催した。

2. ボランティア研究会

2002年度から始まった研究プロジェクト(研究パートナー:キリン福祉財団・京都市社会福祉協議会)であるが研究テーマは以下の3点である。

・ボランティアプログラムの臨床研究

研究方法的にはライフデザインプロジェクトと同様にプログラム臨床研究による。ボランティア活動が社会的評価を高めつつ各地に広がっているが、その活動が社会にどのように貢献し、活動参加者の自己実現や知識や技術の向上、人格形成などの能力開発にどのように関連した可能性を有しているのか、あるいはこの活動をマネジメントしていくためのスキルや人材、財源などの条件についての調査研究はまだ緒についたばかりである。こうした調査研究課題に、地域社会で現実に展開されているボランティアプログラムの臨床を通してアプローチしてみようというものである。ボランティアの困難事例(チャレンジドケース)の研究、に加えて成功事例(サクセスモデル)の研究に着手した。

・「立命館大学ボランティアセンター(仮称)」の設置についての研究

本学には既に各種のボランティア活動に参加する学生及びグループは少なくなく、また地域社会からの学生ボランティアニーズも高い。その活動支援を強化するとともに、ボランティアスキルマッチングのためのプログラムを開発し実践していく拠点として「ボランティアスタディセンター(仮称)」に機能や役割、運営方法等について研究する。実践的には学生主体のボランティアガイダンスを企画し実践したが、その詳細は『学生とボランティア』(2004年3月、人間科学研究所)に収めた。また、本プロジェクトが提起してきた立命館大学におけるボランティアセンター設置構想については全学的な検討委員会(委員長佐藤満教学部長)が設置され、「立命館大学ボランティアセンターの設置について」と題する政策文書がまとめられた(2004年3月)。直後の常任理事会でボランティアセンターの2004年度設置が決定された。

・インターンシッププログラムの研究

ボランティア分野におけるインターンシッププログラムの開発研究。

3. 障害児の放課後ケアに関する調査研究プロジェクト

このプロジェクトも2002年度から始まった。研究パートナーは京都障害児放課後ネットワーク(代表 玉田眞紀美)である。学校5日制が完全実施され、障害児も地域や家庭で過ごす時間がさらに増えた。土曜日の休日は、毎週の「連休」をどう過ごしていくのかという問題とともに、地域で障害児・者に現在どんな制度や居場所が必要なのかを改めて障害家庭やその関係者へ提起している。

この研究プロジェクトでは、京都や全国の制度実践を臨床場面として障害児の放課後ケアの課題にアプローチしている。昨年来実施してきた小中高等学校に通う京都の約4千人の障害児家族へのアンケート調査と聞き取り調査、障害児の放課後ケアを全面的に支えている京都の学生たち(約500名)への活動参加の振返りと障害児の放課後ケアへの問題意識を問うアンケート調査について、ようやく結果をまとめることができた。『障害児の放課後白書』(2004年3月、クリエイツかもがわ、1000部)と題して刊行した。

4. 男性介護者問題プロジェクト

政府の調査によれば介護者のうち5人に1人が男性と言われている。夫婦中心の家族形態の進行からすれば、核家族化の進んだ都市部においては更に高くなると予測されるが、その実態については殆ど明らかにされていない。そのため、私たちは、介護者一般の課題に解消されない、男性介護者固有の実態や課題とは如何なるものか。どのような社会的支援策が必要とされているのか。あるいは我が国の介護保障を進める上で男性介護者問題はどのような位置にあるのだろうか、等について男性介護者の声に依拠しながら考察してみようと考え、「男性介護者の介護実態と社会的支援政策の提案に関する調査研究」プロジェクトを組織した。今年度は「男性介護者への聞き取り調査」を実施した。調査員は立命館大学津止研究室2回生ゼミ・3回生ゼミ・院生・その他など約50人が担当した。45人の男性介護者への聞き取りを行い、調査報告を兼ねて2回(2003年12月8日、2004年2月1日)のシンポジウムを開催した。それぞれ100人を超える参加者を得た。調査結果の詳細についてはWEBマガジン「福祉広場」に連載予定である。

(9) サブプロジェクト 高齢者プロジェクト

(研究代表者: 文学部教授 吉田 甫)

2003年度では、音読計算を行なう学習療法が効果をもつ要因について検討を加えた。前年度の知見から、学習療法が効果をもつ要因としては次の2つが考えられた。1つは課題の学習そのものによる効果、もう1つは利用者とのコミュニケーションによる効果である。今年度は、この要因のいずれが痴呆を伴う高齢者の認知機能を改善するかを検討した。そのために、6ヶ月にわたり、以下の4群を設定して研究をおこなった。

1群(自己学習群): フィードバックなしに音読・計算課題のみ実施した。

2群(消極的対話学習群): この群では、課題の実施に加え、課題に関連したコミュニケーションを実施した。

3群(積極的対話学習群): 2群の要素に加えて、さらに課題に関連するコミュニケーションを積極的に導入した。

4群(対照群): この群は、介入はいっさいおこなわず、査定のみを実施した。

以上4群に関して、定期的な認知機能の査定を行い、効果の違いを検討した。使用した査定方法は、前頭葉機能に特化した検査であるFAB、認知機能全般を測定するMMSEである。これを開始直後、開始3ヶ月後、開始6ヶ月後に行った。その結果、FAB、MMSEともに2群で6ヶ月後に得点の有意な上昇が確認された。その他の群では得点の有意な得点の上昇がみられなかった。このことより、課題の遂行と並行して、課題に関連したコミュニケーションをとることの効果が確認されたといえる。

また、前頭葉機能に関して、新たにSimon課題を用いて、詳細に検討した。その結果、FABの下位項目の分析から確認されたように、抑制機能が学習療法実施群で有意に上昇していた。逆に、対照群では抑制機能の有意な低下が確認された。以上の点から、音読計算による学習療法が認知機能に効果をおよぼすとき、抑制機能が重要な役割を果たしていることが推察された。

(今後の活動の見通し)

これまでの研究知見に基づき、学習療法の効果についてさらに分析する予定である。特に2004年度

は、施設のスタッフに積極的に学習療法の企画、実践に参加してもらい、学習療法実践上の問題点を検討する予定である。

(10) サブプロジェクト 福祉情報プロジェクト(研究代表者:産業社会学部教授 中川 勝雄) (研究会活動のまとめ)

2003年度はWeb型地理情報システムの基本仕様の変更とカスタマイズを中心的な課題として取り組み、地域ボランティア組織との連携をはかるため、あらたに京都市西陣地区において、地域の高齢者生活調査を実施した。

Web型の地理情報システムは、地域における生活・福祉情報システムとして、地域高齢者の家屋、個人情報と地域の福祉資源状況を管理する基本機能を備えている。2003年度にあらたに修正を加えた点は、個人情報の登録・管理システムの部分である。これまでのシステム仕様では、一つの建物に複数の高齢者が居住する際のデータ管理機能が制限されていた。そのため集合建物が多く存在する地域でのシステム活用に問題が残った。あらためられた仕様では、一つの建物に居住する高齢者の情報管理に基本的に制限がない。また個人情報の容量を拡大し、地域ごとの必要な情報を自由に登録・管理できるようにした。高齢者の生活情報には各地域ごとの特性があり、必要とされる情報も地域差があるが、この仕様変更により個別地域の特性に応じた活用がひろがった。また選択される縮尺地図にアイコンが適正サイズで表示されるように修正した。システム上のデータの更新を合理的にすることも課題であったが、この点についてはCSVファイルで作成、保存ができるようにして簡易化をはかった。

西陣地区のボランティア組織と連携をしつつ、Web型地理情報システムの活用をはかってきているが、当該地域の高齢者の生活実態が十分把握されていなかった。今後の連携、研究活動を進める上で、高齢者の生活実態を把握することが課題とされていた。そこで2003年度においては、西陣地区に居住する高齢者への訪問面接調査を実施した。聞き取り内容は地域生活に関することを中心に構成した。対象数220に対し、調査完了は121となった。この調査で得られた結果を地理情報システムの個人情報として組み込むことにより、システム活用の有用性が高まると考えられる。調査結果の地理情報システムへの組み込みは来年度の課題とされる。

また昨年度実施の京都市上京区の民生委員(270名)調査の分析をすすめ、報告書の作成を行った。

(今後の活動の見通し)

Web型地理情報システムに高齢者の生活実態調査からえられた結果を組み込み、視覚的空間的情報として、調査データが活用することを試み、地域活動支援システムとしての充実をはかっていくことになる。

今年度の研究成果の公表状況

<自己決定とQOLプロジェクト>

論文:

坂本真紀・武藤崇・望月昭(2003):「養護学校における自己決定支援パッケージの効果に関する検討」. 行動分析学研究, 18(1), 25-37.

吉岡昌子・坂本真紀・武藤崇・望月昭(2003):「聴覚障害と知的障害がある個人における動詞・目的語2語文の獲得と般化の検討」. 立命館人間科学研究, 6号, 55-66.

濃添晋矢・南美知代・望月昭(2004印刷中):「聴覚障害と知的障害がある生徒における携帯メールを使用した「おつかい行動」の獲得」. 立命館人間科学研究, 7号.

関本正子(2004印刷中):「聴覚障害者に対する効果的なコンピュータリテラシー・トレーニング開発の試み」. 職業リハビリテーション. 17巻.

学会発表:

濃添晋矢・南美知代・望月昭(2003):「聴覚障害と知的障害がある生徒における携帯メールの使用 - 鉄道駅における「駅名報告行動」獲得の検討 - 」. 日本特殊教育学会第41回大会発表論文集, p.576.

南美知代・望月昭(2003):「重い知的障害があるろう者の携帯メールの使用 - メールによる地域店舗での要求充足(物品購入)行動の獲得」. 日本特殊教育学会第41回大会発表論文

集,p.705.

金山好美・望月昭(2003):「ADHD 児における選択機会を用いた集団遊び参加の支援」. 日本行動分析学会第21回大会発表論文集,p.76.

安井美鈴(2003):「慢性期失語症者のQOLの向上を目指す積極的行動支援について」.リハビリテーションのための行動分析学研究会公開シンポジウム、「リハビリテーションに現場における積極的行動支援」

<臨床社会学>

福祉サービスの第3者評価の上記の公開講座は、ミネルヴァ書房から『京都の福祉サービス評価の現状と課題』(仮題)として中村ほか編集により2004年7月頃に刊行予定である。
中村「臨床社会学の可能性」(『家族とアディクション』日本嗜癡行動学会誌、第20巻第4号、2004年1月)

<対人援助学の理論・方法・歴史 QOLサブプロジェクト>

サトウタツヤ・高砂美樹(共著)「流れを読む心理学史」 有斐閣 2003年10月
学術フロンティア推進事業プロジェクト研究シリーズ7を刊行予定

<家族プロジェクト>

論文:

「配偶者からの暴力の加害者更生に関する調査研究」(内閣府男女共同参画局・2003年4月)
「DV-加害者対策からみえてくること」『現代のエスプリ』第441号、2004年3月)
「ドメスティック・バイオレンス-加害者対策」(『家族心理学研究年報』家族心理学会、2004年6月)など

学会報告:

「第20回日本家族心理学会大会シンポジウム報告」

<子どもプロジェクト>

論文:

高木和子「子育て支援をめぐる『支えあいの輪』の機能-子どもプロジェクトにおいて核となる概念の位置づけ-
松岡知子「保育所における一時保育を利用した母親の意識調査」
吉本朋子「育ち合う個と集団の相互作用過程-子育てサークルの親を中心に-」
高田薫「共同問題解決過程としての子育て:他者に頼ることで生じる人との付き合い」
春日井敏之「不登校の多様化と支援ネットワーク-「父母の会」を中心に
津止正敏「障害をもつ子どもの放課後・休日の実態-京都障害児放課後・休日の実態調査から-
櫻谷眞理子「今日の子育て不安・子育て支援を考える~乳幼児を養育中の母親への育児意識調査を通じて」
高木和子「24時間保育から考える これからの子育て・子育て」

<臨床教育プロジェクト>

研究論文:

中川吉晴「『教育における霊性』について」『トランスパーソナル心理学・精神医学』 Vol.4, No.1
中川吉晴「ソマティックスにおける『からだとスピリチュアリティ』」『人間性心理学研究』 21巻1号
中川吉晴「感情変容の臨床教育学」『立命館人間科学研究』 7号
中川吉晴「ホリスティックな観点から見た教師教育」『教育文化』13号

共著:

中川吉晴 日本ホリスティック教育協会編『ピースフルな子どもたち』せせらぎ出版

学会発表:

中川吉晴 ラウンドテーブル「非暴力の教育」教育哲学会46回大会

<バリアフリープロジェクト>

論文:

Higashiyama, A., & Shimono, K. Mirror vision: Perceived size and distance in convex mirrors. Perception & Psychophysics, 2004 (印刷中)

東山篤規. 身を守り実在感を与える皮膚感覚. GPnet(ジーピーネット), 50(1), 36-39. 2003年.

東山篤規. 精神物理学実験入門1: 恒常法と極限法による閾値の測定. ヒューマン・インターフェイス学会誌, 5(2), 125-130, 2003.

東山篤規. 精神物理学実験入門2: ウェーバ・フェッカーの法則と判断の原理. ヒューマン・インターフェイス学会誌, 5(3), 195-202, 2003.

東山篤規. 精神物理学実験入門3: 信号検出理論とその応用. ヒューマン・インターフェイス学会誌, 5(4), 253-260, 2003.

東山篤規. 精神物理学実験入門4: サーストンの関節法とスティーブンスの直説法. ヒューマン・インターフェイス学会誌, 6(1), 31-38, 2004.

学会発表:

東山篤規. 触重力方向の恒常性(2): 触的アウベルト効果. 関西心理学会第115回大会発表論文集, p. 32. 2003年.

山崎校, 東山篤規. 視覚系と身体系による歩行運動での時間・距離・速度の知覚. 関西心理学会第115回大会発表論文集, p. 35. 2003年.

山崎校・東山篤規. (2003年7月). 視覚系と身体運動系による歩行運動での時間・距離・速度の知覚. 日本視覚学会2003年夏季大会抄録集(湘南国際村センター), p. 219.

東山篤規, 古賀一男. ロール(横揺れ)運動をする身体の数値, 移動範囲, 移動時間の知覚. 日本心理学会第67回大会発表論文集, p. 448. 2003年.

對梨成一. 階段の水平踏面が傾いて見える現象について(4) 段のつくる斜面と坂のつくる斜面の比較. 関西心理学会第115回大会発表論文集, p. 34. 2003年.

對梨成一. 2階段の水平踏面が傾いて見える現象について(3) 仮想面における横断成分の知覚. 日本心理学会第67回大会発表論文集, p. 455. 2003年.

對梨成一. ゆがんだ階段錯視: 見かけの傾きに及ぼす横断成分と視点の高さの効果. 大阪交通科学研究会平成15年度研究発表会. P. 17-18. 2003年.

学会発表(予定):

對梨成一. 2004 坂道錯視: 遠方の坂の見かけの傾きに及ぼす遠坂の形と手前の坂の効果. 第37回知覚コロキウム(発表予定). 2004年.

<ライフデザインプロジェクト>

論文:

津止正敏・藤本明美・斎藤真緒『子育てサークル共同のチカラ - 当事者性と地域福祉の視点から -』文理閣、2003年5月

津止正敏・立田幸代子「障害をもつ子どもと家族の放課後・休日の実態 - 京都障害児放課後・休日実態調査から -」立命館大学人間科学研究所『立命館人間科学研究第7号』、2004年3月

津止正敏・津村恵子・立田幸代子『障害児の放課後白書 - 京都障害児放課後・休日実態調査から -』クリエイツかもがわ、2004年3月

津止正敏・足立陽子『学生とボランティア』立命館大学人間科学研究所、2004年3月(予定)

<高齢者・認知リハビリテーション プロジェクト>

論文:

吉田甫・大川一郎・土田宣明 2003 痴呆を伴う高齢者に対する認知リハビリテーションの効果に関する予備的研究, 立命館大学人間科学研究, 6, 1-9.

土田宣明・大川一郎・吉田甫 2003 高齢者を対象とした認知リハビリテーションの試み(1)-MMSとFABによる効果の検討-, 日本心理学会第67回大会発表論文集, 298.

大川一郎・土田宣明・吉田甫 2003 高齢者を対象とした認知リハビリテーションの試み(2)-日常生活への効果の検討-, 日本心理学会第67回大会発表論文集, 299.

Yoshida, H., Okawa, I., Tsuchida, N. et al., 2004 Effect of Communication in Learning Therapy : Psychological Research, Second International Symposium for Learning Therapy.

種別1	種別2	研究会名	開催日	テーマ	報告者
	A1-1	自己決定とQOL	8/7~9	ろう重複の生徒を対象とした携帯メール使用のための合宿訓練	(応用・院)南美知代・望月昭
			月2回 (4/1~	ろう重複の生徒を対象とした携帯メール使用のための集中訓練	(応用・院)南美知代・望月昭
			月2回 (4/1~	養護学校生徒を対象とした自己決定支援のための訓練セッション	(応用・院)穴見明子・武藤崇
	A1-2	臨床社会学部会	4/24	当事者の語りと臨床社会学の課題	(社・院)中根 成寿
			5/20	文献研究 ダニエル・ベルト著『ライフ・ストーリー - エスノ社会学的パースペクティブ』をめぐって	(社・院) 西田 心平
			5/23	犯罪被害者問題と臨床社会学	(朝日新聞編集委員)河原理子
			6/3	文献研究 『聞えない親をもつ聞える子どもたち - ろう文化と聴文化の間に生きる人々 - 』	(社・院) 中根 成寿
			6/10	文献研究 箕浦康子著『フィールドワークの技法と実際 マイクロ・エスノグラフィー入門』	(応用・院) 伊藤 晴美
			6/17	親となることと妊娠・出産期のケア	(衣笠総合研究機構ポストドクトラルフェロー) 松島 京
			10/7	ヒューマンサービス プラットホームのデータベース構築にむけて	(応用・院) 浜田 健右 (社・院) 中島 清美
9/3~3/5			データベース検討計30回		
A1-3	対人援助の理論・方法・歴史	9/5	フィールドでの「声」をどのように聞くのか? - 「加工」以前の現場研究覚え書き -	(大阪体育大学短期大学部) 草山 太郎 (札幌国際大学・講師) 宮内洋	
		9/5	フィールドでの「声」をどのように聞くのか? - 「加工」以前の現場研究覚え書き	草山太郎氏(大阪体育大学短期大学部介護福祉科専任講師) 宮内 洋氏(札幌国際大学)	
		11/8	中学校保健室の今日的機能と養護教諭の役割 『逸脱』『問題』とされる生徒が訴えたこと、見つけたかったこと 環境問題解決への一考察 環境ボランティアからのアプローチ 語られる『望む性を生きる』自己 性同一性障害者の場合 『不妊』経験の再著述 不妊治療経験者の語りから	(応用・院) 伊藤 晴美 (応用・院) 西尾 孝明 (応用・院) 涌井 幸子 (応用・院) 安田 裕子 コメンテーター (滋賀県立大学) 松嶋 秀明	
		11/9	2003年度後半期公開企画 第1弾 ナラティブ・ベイスド・メディスン: 医学と人間科学のコラボ	(富山大学) 斎藤 清二	
		12/10	多変量データ解析の新たな方法: 個人で異なる刺激・評定項目を用いた多重属性知覚マッピング (Multi-attribute perceptual mapping using idiosyncratic object and attribute sets)	(Pompeu Fabra大学・研究員) Michel Van de Velden	
		12/10	前座発表(関連分野紹介) 多変量データ解析入	(文) 足立 浩平	
A1-4	家族				
A1-5	子ども(育ち合い)	5/7	成人期の発達について	(文・学部生) 小倉 直子	
		6/13	2歳児の「ふり」の発達 - 模倣・ふり・遊びとの関係から -	(応用・院) 荒井 庸子	

種別1	種別2	研究会名	開催日	テーマ	報告者		
学術プロジェクトおよび 芸術フロントティア推進事業			6/21	子ども・ライフデザイン合同シンポジウム 「これからの働き方と子育て・子育てを考える - 24時間保育の現場から -」	(特定非営利活動法人子どもの森幼稚園園長) 谷 章子 (蜂ヶ丘保育園保育士) 鈴木理恵 (東大阪市児童部児童課母子自立支援員) 千葉 郁子 (産)前田 信彦 コーディネーター: (文)高木和子 (産)津止正敏		
			7/16	今年度前期の活動報告と今後の展望について			
			8月18・ 19・21・ 25・26・28	保育園児観察			
			9/29	不登校へのネットワーク支援と「父母の会」 - 子 どもと向き合う大人が変わるとき	(文) 春日井 敏之		
			10/2	子どもプロジェクト公開講演会 ベトナムにおける障害児教育の現状 ベトナムの大学と学生生活	(国立ハノイ師範大学) ゲ エン・チ・ホアン・イエン (国立ハノイ師範大学) デ イン・クアン・バオ		
			2/19	研究報告会～立命館大学人間科学研究「第7号 発行に向けて～ プロジェクト育ち合い部門の中間報告として、3 月発行予定の紀要で特集を組みました(内容の 一部についてはライフデザインプロジェクトとの 協賛)。その内容について報告します	(文)高木 和子 (産)津止 正敏 (産)櫻谷 眞理子 (文)春日井 敏之 (京都市スクールカウンセ ラー・非常勤講師)吉本 朋 子 (大阪大学大学院生)松岡 知子		
			2/29. 3/1	山形市における子育て支援および一時保育利用 者の調査	(文)高木和子他		
			9月より定 期的に開 催 継続	障害児の発達診断研究(あひるクラブ)	(応用・院)河野 他		
				付属中高における教育相談研修	(産)高垣 (文)春日井 (中高)中坊		
			A1-6	臨床教育	4/26	自己発見ワークショップ3	(応用・院) 佐貴 幸代 他
					5/24	自己発見ワークショップ4	(応用・院)佐貴 幸代
					6/6	イラク戦争を日本の子どもたちはどう見たか	(芸術・言語セラピー研究所 「青い丘」主宰) 川手 鷹彦
					7/6	文化の核心としての治療教育	(芸術・言語セラピー研究所 「青い丘」主宰) 川手 鷹彦
					7/19	身体ほぐしワークショップ	(ミッテ主宰・竹内敏晴演劇研 究所修了生) 五十川 啓子
					10/10	芸術による自己変容/アートワークショップ	(トロント大学・院修了) 松田 佳子
					11/3	治療教育の実際 悪と死の哲学	(芸術・言語セラピー研究所 「青い丘」主宰) 川手 鷹彦
					11/4	治療教育の実際 アスペルガー症候群について	(芸術・言語セラピー研究所 「青い丘」主宰) 川手 鷹彦
					11/5	実存とコスモス - 建設的ポストモダニズムと 実 存 の次元	(京都大学・院研修員) 林 貴啓
					11/7	「体験をすすめる言葉」を見つける ワークショッ プ	(Center for East-West Dialogue 代表) 村川 治彦
		12/8	シュタイナー教師養成コースで学んだこと	(トロント・シュタイナー・セン ター 教師養成コース修了) 吉田 ゆきえ			
		12/19	ヨーガ・ムーブメント・アート ワークショップ	(Me & My Shadows 主宰) Susan Allen & Susiawan			
		12/19	< 研究所公開企画 > ケアがつなくもの・ひらくもの(プレ企画)	映画「奈緒ちゃん」 プロモーション映画「光の つぶやき」 トーク 伊勢慎一氏(映画 監督)			

種別1	種別2	研究会名	開催日	テーマ	報告者
			12/20	<研究所公開企画> ケアがつなくもの・ひらくもの	映画「えんとこ」 講演 伊勢真一氏(映画監督)
			1/7	「何もしないこと」から「何もしないこと」へ～野口 整体の健康観を中心に～	(大阪国際福祉専門学校・非常勤) 本庄 剛
			1/11,12	キッズ・ゲルニカ・ワークショップ (1月11日) キッズ・ゲルニカへの国際的取り組み	スピーチ (大妻女子大学) 金田 卓也
			2/1,2	治療教育の実際 ワークショップ 「真夜中の 銀河鉄道」実技と討議	(芸術・言語セラピー研究所 「青い丘」主宰) 川手 鷹彦
	A1-7	バリアフリー		通年で月1～2回の研究交換会を開催	
	A1-8	福祉情報	6/10	Web型地理情報システム仕様変更の打ち合せ・ 確認第一回	高橋正人、小澤亘、朝日航洋 株式会社
			6/20	Web型地理情報システム仕様変更の打ち合せ・ 確認第二回	高橋正人、小澤亘、朝日航洋 株式会社
			7/18	Web型地理情報システム仕様変更の打ち合せ・ 確認第三回	高橋正人、小澤亘、朝日航洋 株式会社
			8/7	Web型地理情報システム仕様変更作業第一日	朝日航洋株式会社
			8/8	Web型地理情報システム仕様変更作業第二日	朝日航洋株式会社
			8/22	システムに関する打ち合わせ	
			11/11	福祉情報システム研究会	高橋正人
			1/19	山階学区・西陣地区システム操作インストラク ション	高橋正人
			1/22	医療生協プロジェクトとの合同研究会	高橋正人および朝日航洋株 式会社
			2/12	西陣調査・調査員説明会第一回	
			2/16	西陣調査・調査員説明会第二回	
			2/17	システム開発会社・朝日航洋のヒアリング	
			2/23～ 3/17	西陣地域調査実施	
	A1-9	ライフデザインプロ ジェクト	5/22	京都子育てワークショップ「地域ではぐむ共同 のチカラ」	ライフデザインプロジェクト 主催 こどもみらい館・京都子育て (京都市内障害児学童保育ク ラブ「ぼちぼち」)沖田 友子 (寺内製作所労組) 中川 大
			6/7	障害児のためのボランティア活動 JAM青年協議会 寺内製作所労組の夏祭りでの 取り組み	
			6/21	子ども・ライフデザイン合同シンポジウム 「これからの働き方と子育て・子育てを考える - 24時間保育の現場から -」	(特定非営利活動法人子どもの 森幼稚園園長) 谷 章子 (蜂ヶ丘保育園保育士) 鈴木理恵 (東大阪市児童部児童課母 子自立支援員) 千葉 郁子 (産)前田 信彦 コーディネーター: (文)高木和子 (産)津止正敏
			6/30	第4回合同ケースカンファレンス 心の悩みを持つ人のボランティアについて考える	事例提供者:岩井良哉氏(左 京区社会福祉協議会) 上田千枝氏(京 田辺市社会福祉協議会) スーパーバイザー:辰巳朋子 氏(京都市南青少年活動セン ター相談関連事業専門員)

種別1	種別2	研究会名	開催日	テーマ	報告者
			7/5	公設学童保育の京都, 全国の状況と障害児受け入れにおける課題 障害をもつ子どもを受け入れて	(京都学童保育連絡協議会) 松井 信也 (京都市内学童クラブ) 指導員
			9/5	第5回合同ケースカンファレンス 心の悩みを持つ人のボランティアについて考える	(京都市下京区社会福祉協議会) 米田 啓子 (京都市中京区社会福祉協議会) 数田 浩司 スーパーバイザー (産社) 津止 正敏
			9/7	滋賀県草津市障害児クラブ「元気玉クラブ」活動報告 京都放課後・休日実態調査 報告1	家永 理津子氏(「元気玉クラブ」指導員)
			12/7	男性介護者問題研究会シンポジウム 男が介護すること	コメンテーター (産社) 津止正敏
			2/1	男性介護者の介護実態に関する調査研究 学生たちが聞いた男性介護者の声 男が介護すること 妻を介護する夫の介護実態を中心に	コメンテーター (産社) 津止正敏
	A1-10	高齢者認知リハビリテーション	3/3	< 研究所公開企画 > 学習療法シンポジウム 「音読計算による学習療法の効果を科学する」	基調講演佐藤真一(明治学院大学) シンポジウム話題提供: 佐々木丈夫(公文公教育研究所)、吉田 甫、土田 宣明、大川一郎他4名
			定例研究会	毎週火曜日もしくは水曜日の1時間程度, 研究進行状況の確認と打ち合わせを実施している。	